

# 中世堺と堺古今伝受の土壌

鶴崎 裕雄

\*キーワード

古今伝受・堺伝受・中世都市堺・和泉国土豪・新川盛政の和歌連歌

## デジタル標高

この度、国文学研究資料館の中庄新川家文書の文献

## 地形図を広げて

調査に小高道子氏の参加を得て、堺伝受の実態が新

しく解明されようとしている。これは、長年、堺の中世・近世文化に関心を持つ私にとって（大げさな言い方だが）生涯最高の喜びの一つである。

近年、デジタル標高地形図（日本地図センター二〇〇六年）が出版され、水害時に浸水の被害地が一目瞭然にわかるといって購入する人が多いう。試しに大阪の標高地形図を広げて上町台地を南に進むと、大阪市住吉区の住吉大社が鎮座する辺りは西から大阪湾が入り込んで一つの入り江であったことがわかる。さらに大和川を越えて（大和川は後世、宝永元年（一七〇四）に付け替えられた河川なのでここでは無視しなければならぬ）堺に入ると、現在の阪堺電軌阪堺線の線路一帯が砂堆であったことがわかる。この住吉の入り江と堺の砂堆に漁民たちが村落を形成し、海の神を祀り、港町となり、交易が盛んとなって商業が発展した。

堺で行われた古今伝受である「堺伝受」を論ずる時、我々はこの地形、その商業の発展を無視することはできない。

はじめにお断りするが、「古今伝受」の用語について、古い、近世初頭以前の資料には「古今伝受」とあって、「古今伝授」は見当たらない。目下、本研究会では「古今伝受」に統一している。

## 遺明貿易による

堺は摂津国と和泉国のまさに国境に成立した集落で

## 中世堺の繁栄

ある。国境は現在の大小路（堺市堺区）辺りといわ

れるが、北に北の荘、南に南の荘があった。これが応仁の乱の頃より爆発的に繁栄した。岡見正雄氏の論文「室町ごろ」<sup>注2</sup>に、奈良興福寺大乘院の尋尊の『大乘院寺社雜事記』文明一五年六月二日条から、

和泉堺福天十六人、各女房也、入京之由云々、真実拝見者在之云々、又京都之寶法神五六十人男也、各々罵、ニワ鳥ヲ頭ニイタ、ク、和泉堺へ行向之由下向云々、此説共比興事、一天下申合、希有事也云々。

と引用し、

乃ち京都から貧乏神が堺へ下向したのに対し、和泉の堺からは福天が十六七人も上京し、而も夫れが女房であるといふ巷説も伝はつて

居た。和泉の堺は西洋の所謂自由都市に近い様な性格を持つてゐたといはれ、多くの文化荷担者、画人茶人連歌師等が屢々戦乱を避け之処に集り、やがて近世文化の一大淵藪をなしてゐた事が指摘宇されてゐる。

とコメントを記している。私（鶴崎）は中世界について、いつもこの一説を思い出す。『大乘院寺社雜事記』のいう文明一五年（一四八二）は応仁の乱勃発後一五年、終結後五年である。『大乘院寺社雜事記』の記主尋尊の堺に対する関心は高い。繁栄する堺には京都から戦禍をさけて多くの寺院が移転した。

堺に繁栄をもたらした一大原因は遣明貿易と応仁の乱である。明との交渉は応安四年（一二七二）以降に始まるが、応永八年（一四〇一）に室町幕府の足利義満によって遣明貿易は本格的に始まった。以下、『国史大辞典』5（吉川弘文館）を参照して遣明船略年譜を掲げる。

出発年 帰朝年

- |                        |                                       |
|------------------------|---------------------------------------|
| 1 応永八年 <sup>一四〇一</sup> | 応永九年                                  |
| 2 一〇年                  | 一一年 帰国に「勘合」持参↓勘合貿易                    |
| 3 一一年                  | 一二年 第一次勘合船                            |
| 4 一二年                  | 一三年                                   |
| 5 一三年                  | 一四年                                   |
| 6 一五年                  | 一六年                                   |
| 7 (不明)                 | (不明) 永楽六年(中国暦 <sup>一四〇八</sup> ) 入明の記録 |
| 8 (不明)                 | 一八年 永楽八年 入明の記録                        |

9 永享四年<sup>一三四</sup> 永享六年

10 六年 八年

11 宝徳三年<sup>一三四</sup> 享徳三年<sup>一三四</sup>

12 寛正六年<sup>一四四</sup> 文明元年<sup>一四四</sup>

13 文明八年<sup>一四四</sup> 一〇年 応仁乱勃発後、瀬戸内海を避け、土佐沖を

迂回、この時、湯川宣阿の請負

14 一五年 一七年 甘露寺親長弟取龍首座乗船、帰国は同年

一二月、肥前五島列島に到着、堺帰港は

翌年七月

15 明応二年<sup>一四四</sup> 明応五年

16 永正三年<sup>一四五</sup> 一〇年 大内船と細川船が寧波で抗争

17 一七年 (不明)

18 天文七年<sup>一五六</sup> 一〇年 大内船

19 一六年 一九年 大内船

このように、応永八年以後の遣明船渡航は一九回、内、勘合船は一七回である。その内、寛正六年（一四六九）の第二二次の遣明船派遣までは幕府指導の下、船団は筑前の博多に集結して中国大陸に出航した。しかし応仁元年（一四六七）の応仁の乱勃発以後、細川氏の関わる遣明船は大内氏の支配する瀬戸内海を避け、堺を出港して土佐沖から直接東シナ海に乗り入れて大陸に向かう航路を取った。これにより遣明貿易の利益は直接堺に落ちることとなった。甘露寺親長の日記『親長卿記』を見よう。

甘露寺親長の

甘露寺親長は応永三十一年（一四二四）甘露寺房長

『親長卿記』

の嫡男として生まれ、後花園・後土御門天皇に近侍

した実務官僚である。文明元年（一四六九）正二位、明応元年（一四九二）権大納言に昇進したが、翌年、官を辞して出家。没年は明応九年（一五〇〇）、七七歳であった。

親長の弟に禅僧取龍首座がいた。『親長卿記』文明七年一〇月二八日条に「自泉州取龍首座上洛」とあって、取龍首座は泉州にいたことがわかる。泉州とは堺である。この取龍首座は文明八年の第一三次遣明船に乗船して明に渡った経験がある。そして文明一五年の第一四次遣明船派遣には再び居座として乗船する。居座は遣明船の管理者で、五山の禅僧が任命された。文明一五年度の遣明船は幕府が運営する二艘と内裏が運営する一艘からなり、取龍は内裏船の居座であった。親長は弟を見送るため堺に下向したのである。以下『親長卿記』文明一五年二月・三月の条である。

二月廿七日 午後、出京。夜、淀を乗船。曉方渡部着

廿八日 晴、早且自渡部詣天王寺并住吉等、次詣泉州境南庄南昌

庵、晚有鞠、

廿九日 晴、聞久世舞、次詣正法寺、及晚正法寺上人来、次有鞠、

入夜入風呂、

三月一日～五日（省略）

六日 陰、時々晴、有鞠、依地混早止了、今日予書付太刀十二

振、分書付渡鎮藏主本藏主了、用脚千疋借用、龍首座令

用意太刀、令渡唐也

（略）

七日～八日（省略）

九日 晴、詣棧敷、金剛大夫勸進猿等也鮒鵬、藤右衛門振舞

也、及晚雨下、

十日～廿四日（省略）

廿五日 晴、參詣南庄屋天神、又參詣三村并子亥御前等、次詣吉

祥院法印坊、度々来臨礼也、及晚有鞠、入夜吉祥院来、

又小嶋三宅弥三郎来、尋鞠故実、

廿六日～四月四日（省略）

四月五日 晴陰、入夜雨下、自小嶋二号船着岸之由注進之、予遣唐

太刀十二振、今日出来、渡本藏主了、

六日～十日（省略）

十一日 晴、南庄袖川千阿死去、七十七云々、希代之徳人也、

十二日 晴、千阿今日茶毘、貴賤見物成市、

十三日 晴、自肥前、小嶋二号船着岸境津、

十四日 晴、新黄門室家、并息女三四人、中内侍衆等參天王寺之

次、此辺経廻、今日唐船見物了、

十五日 晴、詣新黄門室家宿、有酒、及晚有鞠、

十六日 晴、女中今日帰京、有鞠、元長朝臣・基富朝臣・永康等

同道、

二月二七日、親長は京都から淀川を下って難波の渡辺に着き、翌日、上

町台地を南へ、天王寺・住吉社に参詣して、堺南庄の南昌庵に入った。

着くと早々、蹴鞠を行っている。親長の甘露寺家は蹴鞠の名家である。

公家たちは地方に下ると各家の専門的な蹴鞠や和歌・管弦などを披露する。都人の伝統的な文化を憧れる地方の有力者たちに応えるのである。

滞在中の記事で次の三点に注目したい。一は、三月六日条に千疋の借金をして太刀（日本刀）十二振を注文したことである。割注に「帰朝時一陪臣用脚可返遣也」とある。日本刀一二振りを渡明する船に託して中国の物品を入手して持ち帰って日本で売却すると倍以上の儲けになって返ってくるのである。弟を見送りに行った親長は、弟を見送るだけでなく、収入の伝手を求めている。このように遣明貿易は、周辺の者に余財をもたらし、堺に富をもたらすのである。

二は、四月十一日条の南庄柚川千阿の死去の記事と翌十二日条の茶毘の記事である。柚川千阿は堺の納屋衆と呼ばれる有力商人の一人湯川宣阿のことで、文明八年の遣明船を請け負い、巨万の富を得たといわれる「希代之徳人」である。これが七七歳で没した。翌日火葬が行われ、貴賤の人々が見物し、市を成したという。堺の住民にとって富を象徴する伝説的商人である。次の遣明船出航を前に亡くなった。珍しい巡り合わせである。

三は、直接には堺の富とは関わりはないが、四月十四日条の「唐船見物」の記事である。新黄門高倉永継の妻が天王寺参詣の後、堺まで足を伸ばして唐船を見物した。唐船は明に向かう遣明船である。都の女性までも見物に赴くのである。永継は親長の息子甘露寺元長室の父、永継夫妻は息子の嫁の両親、一族縁者を挙げて遣明船を見送ったのである。さらに親長の長子氏長は出家して龍霄は叔父取龍に従って同じ遣明船に乗っ

た。ともあれ遣明船への関心は高かった。

前の遣明船略年譜で示したように文明一五年の第一四回遣明船の堺帰港は一八年七月であった。堺海会寺の僧、季弘大叔の日記『蔗軒日録』（大日本古記録岩波書店）文明一八年七月四日条には、

大唐帰朝之船、此日着岸、……是日午時、帰国大船三艘、着于当津、南北歓声喧甚云、

と記されている。堺の人々が遣明船の着岸を歓迎したのである。

### 三条西実隆の

砂糖に蟻が群がるように、富を求めて都の貴紳達が

### 『高野参詣記』

堺に集まった。堺に居を構える者もあれば、堺に旅

する者もあった。大永四年（一五二四）には三条西実隆が高野山参詣の往復、堺に立ち寄り、歌会や連歌会に招かれていた。<sup>注</sup>この頃、堺には牡丹花肖柏が居を構えていた。この時の三条西実隆の紀行『高野参詣日記』（「高野山道の記」『実隆公記』続群書類従完成会）を通して、堺の人々が伝統的な都の文化をどのようにして享受したか、その具体例を眺めてみたい。

三条西実隆は康正元年（一四五五）の生れ。後土御門天皇・後柏原天皇に近侍し、内大臣となった。永正一三年（一五一六）剃髪し、法名堯空と名乗った後も参内し、後柏原天皇・後奈良天皇に仕えた。当代の文化を代表する存在で、日記の『実隆公記』や日次歌集の『再昌草』には公家を始め、幕府の高官・有力地方武士・都の商人など様々な階層の人々が登場する。実隆の没年は天文六年（一五三七）、八三歳であった。

大永四年（一五二四）四月一九日に伏見より淀川を下りって、実隆の

『高野参詣日記』が始まる。天王寺・住吉社に詣で、二〇日に堺に着く。

二二日、堺衆の宗珀を伴って高野山に登り、二六日、堺に帰り、二七日より五月朔日まで堺に泊まり、二日に堺を発ち、三日に帰洛する。その間、往路に一日、復路に四日、特に帰路、堺の人々との文事の交流が行われた。以下『高野参詣日記』の四月二七日から五月一日を見よう。

廿七日はすこしうちやすみぬれば、宗仲が寮にて一盞など侍りき。

廿八日は阿弥陀寺へ招請ありしかば、まかり向て大師の御作の弁才天など拝見、たうとくなん。近き寺の風呂に入りて、夕つけて帰るほど、堺の浜見めぐりて、光明院にかへりしかば、宗碩、京よりまうできて、帰京の道の事ども申しと、のへぬるよし申し侍る。いとうれしくなむ。

廿九日、高野参詣の前より廿首題をくばりたりしを、けふ夢庵にてとりかさぬべきよしありしかば、かしこにまかりて侍りしに、歌舞におよびてその興あさからず。

#### 旅宿郭公

いざといひて都のつとに草枕さそはまほしきほと、ぎすかな

#### 江上眺望

漕ぎかへり入江の船の夕波にさかひしらるゝをのがうらく

寄「軸木」恋 但此歌遣宗碩令書之了。

宮木ひく声にこたふる山ひこも我うちわびてなくはしらずや

五月朔日、光鎮といふもの連歌興行すべきよし頻りに申し侍しかば、光明院にて一座ありしに、

浜松の名にやこたへしほと、ぎす

みじか夜おしき浦なみのこゑ

すゝしさを光に月は秋立ちて

この後、「二日、堺をたちて住吉にまうで、」とあつて、実隆は迎えに

来た宗碩と帰洛する。右の『高野参詣日記』を見ると、二七日は高野参詣の疲れを癒やして宗仲が寮で酒を飲み、二八日は阿弥陀寺で弘法大師作という弁財天を拝見し、近くの寺で風呂に入り、浜辺を散策した。この風呂は堺の名物の塩湯であろう。この日、京都より宗碩が下向した。実隆の上洛を迎えるためである。二九日には高野山に出発前に歌題を出しておいた二十首の続歌が肖柏の夢庵で行われた。歌題は「旅宿郭公」「江上眺望」「寄「軸木」恋」ほか、短冊には宗碩が題を書いた。

五月一日には実隆の宿所の光明院で百韻連歌が行われた。写本が現存するので、初折表八句を挙げる。<sup>注6</sup>

#### 何 船

浜松の名にやこたへし郭公

みしか夜おしき浦波の声

涼しさをひかるゝ月に秋立ちて

夕露わくる片岡の末

虫の音に野辺の宿りや頼るらん

薄うちちる風の寒けさ

残る日は衣手薄み移ろひて

結ほ、れ行く庭の初霜

牡丹花

宗碩

雪（実隆の一字名）

肖柏

宗碩

光鎮

周桂

重吟

宗碩

雪

(以下略)

この百韻連歌は、四句目を詠む光鎮が連歌会の準備をし、費用を持つ興行主である。「光鎮といふもの」とあるのがいかにも実隆にとつて初めて会った人物であることを示している。前内大臣の実隆や肖柏・宗碩といった一流人を一座に加えた連歌にはかなりの謝礼がなされたであろう。堺衆の経済力が窺われる。前に実隆を高野山に案内した宗珀や堺に戻った翌日、実隆に一盞を勧めた宗仲たちは、堺に居住している肖柏の許に入りし、和歌や連歌の仲間であり、弟子である。

この仲間や弟子との交わりは、当時の、中世末期の他の場所とは異なる特徴があった。その交わりには職業や身分や種々雑多な人々が集まった。そこに中世都市堺の特徴がある。肖柏と同じ頃、場所も堺と摂津の池田という、全く同じ処に居住した招月庵正広の歌集『松下集』より池田と堺の歌会に集まる人々を比較して、堺の特徴を考えてみたい。

正広の歌集

招月庵正広は肖柏と同時代の歌僧である。応永十九年(一四二二)生まれ、室町時代前期の代表的な歌人

『松下集』

正徹に師事し、一条兼良や細川勝元・能登守護畠山義忠らと親交を持ち、長享三年(一四五九)正徹没後、招月庵を継承し、寛正五年(一四六四)には大内教弘に招かれて周防・筑紫を旅している。応仁元年(一四六七)応仁の乱が勃発すると南都や大和の長谷寺に住み、美濃の斎藤妙椿や駿河の今川氏・能登の畠山氏を訪ねた。文明二年(一四七九)堺北庄の金光寺に住み、長享年間(一四八七～八九)摂津の国人領主池田氏を頼って池田にも庵を持ち、堺・池田・京都を常に往復した。没年は

明応三年(一四九四)八二歳であった。

正広には国会図書館本の歌集『松下集』六冊があつて、この内、第一冊・第四冊・第五冊は日次詠草で、第一冊は応永三一年(一四二四)～文明一四年(一四八二)、第四冊は文明一五年～延徳元年(一四八九)、第五冊は延徳二年～明応二年(一四九三)の歌である、第二冊・第三冊・第六冊は四季・恋・雑の部立詠草である。この内、日次詠草の詞書きには歌会の年月日や一座の顔ぶれが記されている。ここで池田における歌会と堺における歌会の詞書きを挙げて比較してみたい。第四冊の長享二年(一四八八)の一年を見る。各詞書きの頭に「池田」「堺」と印を付ける。

(長享二年)

池田 二月四日、池田若狭守正種かたより迎來たるにまかり侍る

池田 同六日、兵庫助正盛すゝめにて一座ありし

池田 九日、民部丞綱正すゝめにて三首うた合に

池田 十五日、藤原正種すゝめにてうた合ありしに(池田氏は藤原を称す)

堺 (二月) 廿七日、引撰寺但察にて

堺 三月三日、人にさそはれて、浦のしほひを見侍て、かへさに觀乗と云

人のところにて一座ありしに

堺 九日、草庵会に

堺 二十二日、引撰寺月次三首に

堺 卯月廿日、細川阿州よりすゝめ給ふ

堺 五月十三日、引撰寺のうた合に

堺 廿九日、本国寺住持日円、堺の末寺成就寺へ下られ侍に見参し、短冊

を出し、一首所望に

田池 (七月) 九日、池田若狭かたよりむかひ来て下侍る、同名彦次郎正誠

過し二日死去、中陰のうちに、名号歌三十六首す、められし

廿三日に、さかいの草庵へかへり侍る

堀 八月十五夜、人々来て一座ありしに

堀 廿日、草庵月次に

田池 九月十日、池田若狭守方より、可来とてむかひあり、同十一日、京よ

り飛鳥井新中納言宋世、上原豊前守、その外あまた同道あり

て若狭所へ下給ふ、十三日、三十首統歌ありし中に

堀 十月六日、引撰寺月次六月分歌合沙汰有に

堀 十四日、宗椿すゝめにて

堀 廿四日、草庵へかへり侍る

堀 十一月七日、引撰寺月次当座褒貶

堀 八日、細川阿州より法楽とて題を給はる

堀 廿八日、草庵月次当座褒貶のうたに

堀 十二月十日、引撰寺月次うた合に

以上、『松下集』の詞書きより池田と堺における正広の歌会を見た。

池田の場合、正広出座の歌会は総て国人領主池田氏に関わる会であり、池田氏同名の人々である。九月十日の歌会には公家の飛鳥井新中納言宋世や管領細川氏の被官上原豊前守と同座しているが、これは「若狭所へ下給ふ」都の客人であつて、有馬の湯にでも旅行の途中に池田に立ち寄ったのかも知れない。池田若狭守正種が正広を呼び寄せて飛鳥井宋世や上

原豊前守を歓迎する歌会を催したのである。七月九日の場合は、過日死去した同名正誠の追悼名号歌三十六首歌の献詠である。このように池田にあつては正広は池田氏専属の歌人といえよう。

ところが堺においては趣が異なる。歌会の会場は、引撰寺・正広の草庵・日蓮宗の成就寺、詠歌の趣旨も和泉守護の細川阿波守頼久主催の歌会や法楽歌会・引撰寺月次の歌合わせ・宗椿依頼と様々である。宗椿は肖柏の歌集『春夢草』（『新編国歌大観』第八巻 歌集 角川書店）に、

宗椿法師むなしく成ぬるよし聞侍し、何事にも心ありし人にて……抑此人和歌の道にふかく心をいれて、源氏物語を書く事廿部にをよべり、世にたぐひなきこと、覺侍り、その外わかの草紙筆をさしをく事もなかりき、にはかわづらふことにてなく成侍、そのきはまで彼物語を書けるが、あさがほの巻にいたりてうせにしよし……

とある人物である。『明翰抄』第四一 堺連歌師（統群書類従三二輯下 統群書類従完成会）にも、

宗椿 同、坂東屋連歌中源氏物語朝貌ノ巻書ナカラ死とある。「坂東屋」という屋号の堺衆であつたことがわかる。

長享二年の一年だけの例ではあるが、池田と堺では正広の許に集まる和歌の同好者の顔ぶれもこのように違う。堺では様々な人々、武士をはじめ、僧侶や商人の堺衆たちである。

**牡丹花肖柏** 正広と同じ頃、前の『高野参詣日記』で見たように、池田と堺伝受 田から堺に移った歌人に肖柏がいた。肖柏は、権大納言

中院通淳の側室の子で、父が早く亡くなったので、兄通秀に養育された。

通秀には『十輪院内府記』という日記があり、肖柏の記事も散見する。

肖柏は「牡丹花肖柏」と呼ばれ、別号に「夢庵」がある。歌集に『春夢草』、句集にも同名の『春夢草』がある。歌集は部立詠草を中心に編集されているので、前述の『松下集』の日記詠草のように歌会の時期や場所・参加者は詳しくはわからない。しかし『松下集』と同じように池田では国人領主池田氏と関わる歌会、堺ではかなり開放的な、職業や身分に囚われない歌会が行われていたと想像される。前に三条西実隆の『高野参詣日記』を見たが、都への帰途、堺で実隆を接待し、歌会・連歌会を催した人々は堺における肖柏の門弟たちであろう。

実隆の高野参詣に随行した堺衆の宗伯については、江戸時代前期に成立した『顕伝明名録』（政宗敦夫編 日本古典全集 昭13）に、

牡丹香花的伝弟子、堺連歌師、伊予屋、古今伝授

とあって、「伊予屋」という商人の堺衆で、肖柏から「古今伝授」を受けたとある。いわゆる堺伝受である。堺伝受の初期的な資料である。

#### 戦国期、

まとめて代えて戦国期、応仁の乱（応仁元年、

#### 堺年譜

一四六七）から元和偃武（元和元年、一六一五）までの堺

を中心に年表に纏めておきたい。なおゴシックの算用数字は月を表す（○の数字は閏月）、また本稿で扱った事柄もゴシックで記した。

応仁元年<sup>一四七</sup>

5 応仁の乱勃発、

文明元年<sup>一四九</sup>

第七次遣明船（寛正六年一四六九日本出航の勘合貿易

船）帰国、

文明五年<sup>一四七</sup>

3 山名宗全没、5 細川勝元没、

文明八年<sup>一四八</sup>

一五年<sup>一四八</sup>

明応二年<sup>一四九</sup>

明応九年<sup>一五〇</sup>

永正五年<sup>一五五</sup>

永正八年<sup>一五八</sup>

大永三年<sup>一五三</sup>

大永四年<sup>一五四</sup>

大永六年<sup>一五六</sup>

天文一二年<sup>一五七</sup>

天文一八年<sup>一六三</sup>

弘治三年<sup>一五五</sup>

永禄三年<sup>一五六</sup>

永禄四年<sup>一五七</sup>

永禄五年<sup>一五八</sup>

永禄七年<sup>一六〇</sup>

永禄八年<sup>一六一</sup>

4 第一三次遣明船、応仁乱の影響で瀬戸内海を避け、土

佐沖を迂回、この時、湯川宣阿の請負、

4 第一四次遣明船、甘露寺親長弟取龍首座乗船、6『大

乗院寺社雜事記』に堺の福天、入京の噂の記事、

3 第一五次遣明船、④細川政元、將軍義材を追放（明応の政変）、

10 後柏原天皇踐祚、

6 足利義尹、周防より入京、義尹將軍、細川高国管領、

大内義興と両京兆体制成立、

8 細川政賢入京、細川高国・大内義興京都奪還（船岡山

合戦）

4 大内船と細川船が寧波で抗争

4 三条西実隆高野参詣、途中堺で肖柏らの歓迎を受ける、

4 後奈良天皇踐祚、

8 ポルトガル船種子島漂着し、鉄砲伝来、

7 フランシスコ・ザビエル鹿児島に着く、

10 正親町天皇踐祚、

2 三好長慶、飯盛城入城、

ガスパール・ヴィレラ書簡に堺は「ベニス市の如く……」

ガスパール・ヴィレラ書簡「他の諸国において動乱あるも……」

7 三好長慶、飯盛城で没、三年間秘す、

5 三好儀継・松永久通、足利輝將軍殺害、

永禄九年<sup>一六</sup>

## 新川盛政誕生、

永禄十一年<sup>一六</sup>

9 織田信長、足利義昭を擁立し入京、10 信長、堺に二万貫の矢銭要求、10 義昭征夷大將軍、

天正元年<sup>一五</sup>

4 武田信玄没、7 信長、京都より義昭を追放（室町幕府滅亡）、8 信長、越前朝倉義景・近江浅井長政を討つ、

天正三年<sup>一五</sup>

4 信長、大坂（石山）本願寺攻撃、5 信長、安土城に移る、

天正七年<sup>一五</sup>

3 本願寺顕如紀伊雑賀に退去、8 本願寺教如雑賀に退去、4 信長、武田勝頼を討つ、6 明智光秀、信長を討つ（本能寺の変）、光秀没、

天正一〇年<sup>一五</sup>

4 羽柴秀吉、柴田勝家を討つ、7 本願寺顕如・教如、紀州より和泉貝塚移動、

天正一一年<sup>一五</sup>

3 根来・雑賀衆、岸和田・堺攻撃、盛政初陣、4 秀吉・徳川家康対立（小牧長久手の合戦）、

天正一二年<sup>一五</sup>

3 秀吉、根来・雑賀攻め、以後、盛政はじめ新川氏、羽柴（豊臣）秀長に従う、5 本願寺顕如、天満へ移動、8

天正一三年<sup>一五</sup>

長曾我部元親、秀吉に降伏、

天正一四年<sup>一五</sup>

11 後陽成天皇踐祚、12 秀吉、太政大臣・豊臣姓を賜う、

天正一五年<sup>一五</sup>

5 島津義久、秀吉に降伏（九州攻め）、

天正一六年<sup>一五</sup>

4 後陽成天皇聚楽第行幸、

天正一八年<sup>一五</sup>

7 北条氏、秀吉に降伏（小田原攻め）、陸奥・出羽平定（全国統一）、8 徳川家康、関東入部、

天正一九年<sup>一五</sup>

文禄元年<sup>一五</sup>

文禄三年<sup>一四</sup>

文禄四年<sup>一五</sup>

慶長元年<sup>一五</sup>

慶長二年<sup>一五</sup>

慶長三年<sup>一五</sup>

慶長四年<sup>一五</sup>

慶長五年<sup>一六</sup>

慶長八年<sup>一六</sup>

慶長一六年<sup>一六</sup>

慶長一九年<sup>一六</sup>

元和元年<sup>一六</sup>

元和八年<sup>一六</sup>

元和一五年<sup>一六</sup>

元和一八年<sup>一六</sup>

元和二〇年<sup>一六</sup>

元和二三年<sup>一六</sup>

元和二六年<sup>一六</sup>

元和二九年<sup>一六</sup>

元和三二年<sup>一六</sup>

元和三五年<sup>一六</sup>

元和三八年<sup>一六</sup>

元和四一年<sup>一六</sup>

2 秀吉の命により千利休自刃、

1 朝鮮出兵（文禄の役）、

3 秀吉、吉野・高野参詣、

7 秀吉の命により秀次自刃、

⑦ 京都大地震、9 明との講和決裂、

1 朝鮮出兵（慶長の役）、

2 新川盛政ら蟻通明神法楽連歌、玉津島法楽和歌ほか、

8 秀吉没、朝鮮より撤兵、

9 家康、伏見より大坂城に入る、

8 新川盛政ら十五夜宴歌合、9 関ヶ原の合戦、新川盛

政、東軍（徳川方）に出陣、

2 家康征夷大將軍となり江戸幕府開闢、7 秀頼と千姫結

婚、

2 新川盛政ら駿府で家康に拝謁、3 家康・秀頼会見、

11 大坂冬の陣、

5 大坂夏の陣（元和偃武）、

なお新川盛政の没年は元和八年<sup>一六</sup>、五七歳、元和偃武より八年後であった。

注

- 1 小高道子「相伝と伝受―古今伝受の表記をめぐる―」中京大学文学部紀要41 平19・3ほか。
- 2 岡見正雄「室町ごころ」京都大学『国語国文』昭26・11（『室町ごころ』角川書店昭53）
- 3 大利直美・鶴崎裕雄「大乘院尋尊と中世都市堺」『大乘院寺社雑事記研究論集』第二巻 平15。『大乘院寺社雑記』中、堺に関する記事は一一五カ処以上に及ぶ。
- 4 文明一五年度の遣明船の取龍乗船については、小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』（刀江書院 昭16）が最も古い基本的な研究といえよう。さらに、今泉淑夫『東語西話室町文化寸描』「江南院龍霄」吉川弘文館 平6。伊藤幸司『中世日本の外交と禪宗』吉川弘文館 平14。最近では末柄豊「東山御文庫に残された足利義政女房奉書について―文明十五年度の遣明船と取龍首座とに関する一史料―」（東京大学史料編纂所研究成果報告書 平20・1）に詳しい。
- 5 鶴崎裕雄「堺、塩風呂と連歌―三条西実隆「高野山道の記」に見る都市の一面―」大阪歴史学会『ヒストリア』100 昭58・9。鶴崎裕雄「文学に見る中世都市堺の残像」関西大学『なにわ・大阪文化遺産学研究センター2007』平20・3ほか。
- 6 この連歌百韻の写本は静嘉堂文庫（連歌集書三一）・大阪天満宮文庫・天理大学図書館綿屋文庫にある。
- 7 翻刻には『私家集大成』6 中世IV（明治書院 昭51）と『新編国歌大

観』8（角川書店 平2）がある。本稿は『私家集大成』による。

前号（調査研究報告 第36号）の鶴崎裕雄「新川盛政駿河下向記」の史料的研究―中庄新川家文書研究会報告―に記したように、中庄新川家文書の調査を機に鶴崎・山村・近藤・大利が新川家文書の研究会を発足させた。それに住吉大社・玉津島仁社に奉納の古今伝受後に各五十首和歌見学を機に、小高が調査及び研究会に参加した。それにより新川家伝来の古今和歌集聞書が「堺伝受」であることが明らかになった。

本報告には、山村規子は翻刻の下準備に協力し、近藤孝敏は歴史研究の立場から各論に有効な示唆を与えた。また山村は泉佐野市中庄の新川家旧地や、蟻通神社・玉津島神社の現在調査を行った。このように、小高の参加によって研究会は昨年に続いて、今回のような報告をすることができた。もう一つ記しておきたいのは、小高を中心に昨年（平成二十八年）十二月、住吉大社においてシンポジウム「歌神と古今伝受」を行なったことである。改めて国文学研究資料館に感謝申し上げたい。